

共存・共栄と共存・共生の精神の現象論的差異 —21世紀東京オリンピックの偶発的レガシーと大学建学の精神—

Phenomenological Difference of Co-prosperity and Symbiosis about Coexistence ;
Contingent and Intangible Legacy of Tokyo 2020 Olympic and School Philosophy

大藪 敏 宏
OYABU Toshihiro

人口に膾炙した「共存共栄」と違い、それと一文字しか違わない共存共生は国語辞典にも載っていない。このわずかな違いが示唆する概念的差異について、近年の特徴的な社会現象をケーススタディとして比較対照することによって、その含意の違いの解明にとり組む。東京オリンピックをめぐるオリンピック憲章にある理念と現実との落差を多面的に整理する中で、未来への教訓と有形無形のレガシー(遺産)をどう継承するべきか。こうした現代の課題との対比の中で、富山の地域哲学の中で形成されてきた共存共生の基本理念がどのような独自性と創造性を、どのような固有の偶然的歴史的経緯の中で身につけてきたのか。マイノリティの権利やダイバーシティならびに環境への責任や持続可能性を尊重する今日のSDGsやオリンピック憲章を念頭に置くとき、この共存共生の地域哲学の現象学的先駆性が明らかになる。

キーワード： 自校史教育、地域哲学、オリンピック・レガシー、ダイバーシティ、SDGs

1. はじめに—公共生活の偶然性をめぐるSDGsと共栄の精神の現象学—

2022年5月11日、週間の点字新聞「点字毎日」は創刊百年を迎えた¹。約1世紀にわたって発行し続けている日本唯一の点字新聞で、世界的にも類例を見ないという。1922(大正11)年の創刊時、点字の普及も初期の途上で収益性も持続可能な発展(SD)も見込めず、福祉という概念も確立しておらず、ましてやSDGsという概念もまだ百年先の時代。大阪毎日新聞社(当時)でも反対意見が多かったという。当時の社長の本山彦一の「これはいい案だ。ぜひやろう。損得など問題ではない」の一言で実現をみたという²。1998年に、「点字毎日活字版」(タブロイド判)も創刊している。

2022年8月17日に東京五輪・パラリンピックをめぐる汚職事件で、大会スポンサーだった紳士服大手「AOKIホールディングス」(横浜市)から計5100万円の賄略を受け取ったとして、東京地検特捜部は、大手広告代理店電通出身で大会組織委員会の理事であった高橋治之容疑者を受

託収賄容疑で逮捕した。「AOKI」は五輪エンブレム入りのスーツなどの公式商品を一般販売し、計約3万着を売り上げたとされている³。9月6日、高橋治之容疑者が再逮捕され、新たな逮捕者が出たことを受け、日本オリンピック委員会（JOC）の山下泰裕会長は都内で「極めて残念。オリパラのイメージが非常に悪くなる」と取材に応じている。2030年冬季五輪・パラの札幌招致への悪影響が懸念される中、山下会長は「謙虚に受け止め、我々にできることを精いっぱいやっていく」と話している。招致に向けた札幌市の8日の会合について、スポーツ庁の室伏広治長官は「札幌市民、北海道民のサポートがなければ(招致は)できない」との認識を示した⁴。9月14日には出版大手「KADOKAWA」の角川歴彦会長が新たに贈賄容疑で逮捕された。大会のオフィシャル・スポンサーとして大会の『東京2020オリンピック公式ガイドブック/カドカワプレミアム』の発行との関係が報道されている。会長の周りは「イエスマン」だけで都合の悪い情報が届かず「会長は裸の王様」になり、「会長がやりたいと言えば、誰も逆らえない社風。事件をきっかけに会社の体質が変わってほしい」と話す社員もいると報じられた⁵。検察庁の捜査の初期はもちろん、当分は憲法上の「無罪の推定」が前提である。それゆえにここで問われるのは個人の法的責任ではなく、ここで私たちが共有している文化的背景とそれと一体の社会意識と社会変動の行方である。それは他人事ではなく、まさに私たち自身の文化社会学的運命を規定するからである。

百年前に「損得など問題ではない」の一言で始まった点字新聞が今も「点字(大阪)毎日」という百年前の創刊時と同様の素朴なブランド名を維持しているのに対して、2022年夏に東京地検特捜部が逮捕に踏み切った東京五輪・パラリンピックの汚職事件では、業界の代表的企業のブランディングが「AOKI」や「KADOKAWA」という大文字のローマ字で表記されている点で共通していることが特徴的である。「電通」の商標は伝統的な響きがあるが、表記は贈賄側との文化の共通性を感じとる向きもありうる。

「損得」ぬきならば共存・共栄は実現しなくても、理の当然必然とも言える。なぜならば共栄の考えには繁栄の共有が不可欠だからだろう。もちろん共存共栄なら代表的日本語辞典の『広辞苑』に「ともに生存し、ともに繁栄すること」と記載されるように既存の汎用性があるが、共存共生はどの日本語辞典にもまだ記載されていない個性と独創性がある。

ここに共存・共栄と共存・共生との間のたった一文字の差異が示唆する価値観または文化圏の違いの片鱗が見える。このたった一文字の違いは、実は今日のSDGsの時代において、小さな問題ではないことが研究の推移とともに明らかになる。環境や資源や食料の問題だけでなく、マイノリティやダイバーシティにどう取り組むのかという問題を、SDGsもオリンピック憲章も私たちに突きつけているということが大切である。

本稿では、こうした現代の文化の社会学をめぐる問題について、スペイン風邪以来百年ぶりのグローバル・パンデミックの中で紆余曲折の苦難を経験した東京オリンピック・パラリンピックというグローバルな世界最大級のイベントをめぐるそのレガシー(遺産)に変動する社会構造の軌跡が国際的にどのような文化変動をもたらしているのかを考察しながら、21世紀文化の進路と課題を明らかにする中で、長い年月の中で育まれた富山の地域哲学が生み出した共存・共生の精神と一般的な共存・共栄の精神との違いとその意味を探求する。富山の地域哲学がどのように先駆的であったのか、それが人それぞれの個別的人生航路(つまり教養)と事情の中でその先駆性をそ

れぞれいかに独自に獲得し開拓しなければならなかったのか、そこにこの地域哲学の知性と教養と個性が明らかになる。地域の教養とは単に知識が広いとか狭いとかということではない、ということが示されるが、それこそヘルダー的教養概念に通底するものである⁶。

2. 公共の福祉をめぐる東京オリンピックの有形遺産と公共的意識

オリンピック・パラリンピック競技大会東京 2020 大会は、新型コロナウイルスのパンデミック(世界的大流行)によって史上初の開催延期となった上に、延期された 2021 年夏もまだ感染拡大が進行する最中で「バブル」方式とも言われたコロナ対策の徹底と直前の無観客開催の決定など、空前の異例な状況下で実施された。その当然の結果として、財政面でも異例の収支状況となった。現在はまだ鮮明な記憶に残っていても、間もなく歴史の中で忘れられることも想定されるので、それを記録に残しておくことも意味のあることであろう。

東京都オリンピック・パラリンピック準備局の公式ホームページの中にある「東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会 東京都ポータルサイト」の公開情報によると、組織委員会の収支は、増収努力や経費見直し等により 6404 億円の収支均衡と報告されている。収入は、IOC 負担金 868 億円、TOP スポンサー569 億円、国内スポンサー3761 億円、大会の延期に伴う保険金 500 億円とされ、支出は、仮設等、テクノロジー等の「会場関係」が 1955 億円、競技運営・会場運営をはじめとするオペレーション、輸送、セキュリティなどの「大会関係」が 4449 億円と報告されている。

これに対して、国と都が負担するその他の経費も含めた大会経費の総額は、1 兆 4238 億円（うちパラリンピック経費は 1514 億円）であり、その内訳は、恒久施設、仮設等、テクノロジーなどの「会場関係」が 8649 億円、競技運営・会場運営をはじめとするオペレーション、輸送、セキュリティなどの「大会関係」が 5236 億円、「新型コロナウイルス感染症対策関連」が 353 億円である⁷。

2022 年 8 月 3 日現在、有力検索サイト Google で「オリンピックの遺産」で検索をすると、NHK(日本放送協会)NewsWeb の「オリンピックの施設 “負の遺産” にしないために」(2021 年 12 月 27 日 18 時 40 分配信)がトップに登場する。「この夏開催された東京オリンピック・パラリンピックの経費が公表され、現時点で 1 兆 4530 億円に上る見通しになっていることがわかりました。新型コロナによって 1 年延期され、ほとんどの会場が無観客での開催となるなど異例づくめの大会が、私たちに残したものは」何かが、その公表時点で取りまとめられて報道された—このサイトの掲載文は、ほとんどの場合 NHK が全国放送で報道したニュース原稿と同一のものがアップされているので、その全国的影響力の大きさは言うまでもないものである—。それによると、東京大会の予算は 2013 年に IOC=国際オリンピック委員会に提出した「立候補ファイル」では 7340 億円と明示されていた。ということは、2021 年 12 月時点での見通しは、2013 年時点の立候補ファイル掲載金額の約 2 倍に膨れ上がったということになる。大会経費は組織委員会と東京都、国の 3 者が分担することになっているとのことであるが、都と国の負担は計 8200 億円、そのうち 3500 億円が恒久施設として新たに建設された競技会場である。そのうち東京都が新設した 6 つの施設のうち 5 施設の年間収支は赤字の見通しと云う。しかし国際大会などを誘致して

観客が増えて競技人口が増えればレガシーとして評価されるのではないか、という都の利用促進部長のコメントも紹介され、「巨額の費用をかけて開催された東京大会の教訓をどうやって未来につなげていくかが問われています」と締めくくっている⁸。日本のTVニュース報道におけるその抜きでた視聴率または市場占有率の高さから、その世論に対する影響力の大きさは言うまでもない代表的なニュース報道である。このニュースでは、「東京大会の教訓」と言っても、経費が公表されたというニュースの性格上、施設というハードウェア面にほぼ限定された第一報であることは、その「オリンピックの施設 “負の遺産” にしないために」というニュースタイトルの「施設」の一語にも明示されている。ソフトウェア面における文化的「遺産」については、その調査取材と理解の深まりには、経理面や施設面以上に時間と知的労力を要するという事情を、むしろ逆理的に照らし出したニュース報道の功績を認めることもできる。むしろそれゆえにこそ、次の資料が注目される。

3. IOC 委員買収事件の教訓から開催国との共存共栄のオリンピック精神へ

上記 Google 検索で 2 番目に掲載されるのが三菱総合研究所 (MRI) による「レガシーとは何か」である。日本における一般的な民間シンクタンクによる「オリンピックの遺産」についての理解と解説の一般例として参照に値すると考えられる。その「オリンピック・レガシー」の「(1) 歴史的背景」によると、1998 年のオリンピック招致をめぐる「IOC 委員買収事件」を一契機として、IOC の憲法とも云われるオリンピック憲章に以下の規定が盛り込まれたとされる⁹。

— 「オリンピック競技大会のよい遺産 (レガシー) を、開催都市ならびに開催国に残すことを推進する」(第 1 章「オリンピック・ムーブメントとその活動」第 2 項「IOC の使命と役割」)。—

つまりオリンピック招致をめぐる IOC 委員買収事件という負の契機によって招致に名乗りを上げる都市がなくなるのではないかという負の危機感が発条と原動力になって、オリンピック・レガシーの規程が生まれたということがうかがえる。負のスパイラルを梃子にして、なんとか正の遺産 (レガシー) を生み出そうという近代オリンピック起死回生の願いを、そこに垣間見ることができる。この第 1 章第 2 項の「よい遺産 (レガシー) を、開催都市ならびに開催国に残すことを推進する」という文面には、よい遺産(実体的富)を IOC ならびに IOC 汚職委員だけが独占するのではなく、「開催都市ならびに開催国」にも分配しないと開催希望都市の後続候補が名乗りを上げなくという危機感が滲み出ているようにも感じられる。そこにあるのは IOC の委員だけが利益(実体的富)を独占するのではなく、IOC と開催都市ならびに開催国との間の共存・共栄の精神である。すなわち IOC や委員だけが利益を独占するのでは「最大多数の最大幸福」という功利主義的な持続可能性が途絶える心配があるから、近代オリンピックの長期的な持続可能性(SDGs)のためには、IOC と開催国との共存・共栄の精神が必要となる。上記の規程は、こうした共存・共栄の精神を表現している。

したがってその「(2) 概念」は、IOC によればレガシーとは「長期にわたる、特にポジティブな影響」(IOC “Olympic Legacy and Impacts”) と引用する。こうして「オリンピック開催を契機として社会に生み出される持続的な効果」がオリンピック・レガシー(遺産)ということにな

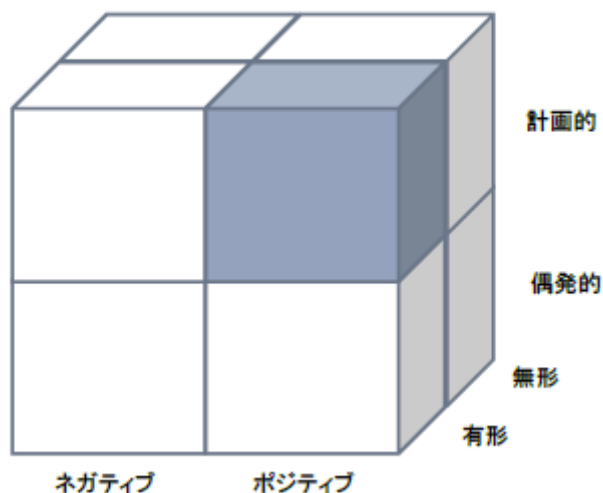
るのである。

4. レガシーキューブと正・負・有形・無形のオリンピック・レガシー(遺産)

さらに、オリンピック・レガシーの分野としてスポーツ、社会、環境、都市、経済の5分野を挙げている（IOC ” Olympic Legacy Booklet”）、とも紹介されている。都市や経済の分野だけではないのである。そしてレガシーの概念的理解を深める際の重要な3つの軸として、①ポジティブなものか、ネガティブなものか、②有形のものか、無形のものか、③あらかじめ計画したものか、偶発的なものか、の3次元の軸が挙げられて、この3基軸構成される六面体はレガシーキューブと云う（Gratton & Preuss, 2008）¹⁰。こうした概念整理をしたうえで、このレポートは「これらのうち、ポジティブ・有形・計画的なもの（いわゆるインフラ整備等）に焦点が当てられがちですが、実は無形・ソフト等も含む多面的な幅広い概念です」と的確に結論付けている。

この的確な洞察からすればレガシーには有形・無形の遺産があつていいように、正負両面があつていいし、計画的・偶発的の両面がありうるはずである。

図 オリンピック・レガシー・キューブ



Gratton & Preuss, 2008 ¹¹

実際その末尾で「(3) レガシーの具体例」では「なお、日本においては、1964年東京大会の際に、東海道新幹線や首都高速道路の整備、体育の日の制定などがなされたことが有名なレガシーとして挙げられます」と記されているように、やはり「ポジティブ・有形・計画的なもの（いわゆるインフラ整備等）に焦点が当てられがち」とはいえ、「今後2020年に向けて、オリンピックを契機とした有形・無形のレガシーをいかに創出し次世代に継承していくかが問われています」とあったように、2021年の経験を経てどのようなレガシーを次世代に伝えていくか、誰かが整理をしなければならない時期を迎えている。もちろん国や都の機関による総合的総括も当然として¹²、国民の納税による財源も少なくない以上は民間の多様な機関や個人による整理も必要であり、

それら整理の相互間での対話がなされることが望ましい。

その際、①「ネガティブなもの」、②「無形のもの」、あらかじめ③「偶発的なもの」にも、冷静に目配りをした整理も必要となるかもしれない。本稿は、こうした幅広い展望のもとで現代の共存・共栄の精神現象学を用意する。

5. 新型コロナのパンデミックと東京オリンピックの延期の偶然性

東京 2020 大会は、そもそもの船出から不穏な雰囲気が始まった。そもそもは日本国内他地域(西日本)でオリパラの誘致運動が先行していたのを、後出しで東京 1964 大会以来二度目の再開となる提案を、2011 年 7 月 16 日に石原慎太郎都知事(当時)が 20 年大会の招致を提案したのを起点とした。他地域からすれば、後出し・横取り・二度目で持っていかれるという不穏な船出であった。あたかも出自の悪さが躓きの始まりであったかのように、2012 年 11 月 15 日に新しい国立競技場の国際コンペでザハ・ハディド氏のデザインが採用されたものの周辺景観問題や莫大な建設費問題で紛糾し、2015 年 10 月の着工予定を前に 7 月 17 日安倍晋三総理が白紙撤回を決め、後のやり直しコンペで隈研吾氏のデザインとなった。7 月 24 日に佐野研二郎氏がデザインしたエンブレムを発表したが、これも後にベルギーのロゴマークの剽窃疑惑が浮上して使用中止とされた。2015 年 11 月 27 日になって大会の基本方針を(東日本大震災)「復興五輪」とすることが閣議決定されたにも関わらず、この基本方針の実感を感じた東日本の住民が稀であったことは周知の事実である。こうした滑り出しの一連の事象から多くの人たちが感じ取るものは、理想や理念があつての開催準備というよりも、利益の共栄先行で基本方針や理念は後付けという印象となったことも周知の事実と言っていい。

2016 年 8 月 6 日に開幕したリオ大会の 22 日の閉会式で安倍総理がスーパーマリオの仮装で登場したことは鮮明な印象を残したが、2018 年 12 月 10 日には JOC の竹田恒和会長が招致買収疑惑でフランスで聴取を受けて、翌 2019 年の 3 月 19 日に退任を表明して、山下康裕氏が後任となった。酷暑を避けるため 2019 年 9 月 28 日午前 0 時のスタートとなったカタールのドーハでの陸上の世界選手権で、女子マラソンの完走率が大会初で 6 割を切り、男子 50 キロ競歩も完歩率約 61%という事態を受けて、2019 年 11 月 1 日には東京 2020 大会のマラソンと競歩の札幌市開催が急遽決まった。

この年末頃から中国武漢で新型コロナ感染の拡大が伝わって来ると間もなく、日本では 2020 年 2 月に横浜港大黒埠頭に停泊した大型クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号での集団感染が報じられて注目されるようになり、3 月になると日本各地に感染は拡大し、2020 年 3 月 24 日には東京五輪の延期を決定した。8 月 28 日に安倍総理が健康問題で辞意を表明し、9 月 16 日に菅義偉新総理の指名となった。こうした経緯で東京五輪が延期されたが、特に五輪の理念との関係で示唆的な現象が連続的に発生するのは、この延期決定後である。それゆえに、このパンデミックによる延期がなければ、五輪の理念をめぐる共存・共栄の(逸脱)現象は発生しなかったかもしれない、ということが一応言えるところに、パンデミックによる五輪延期がもたらした偶発的遺産のアイロニーを看取することができる。

6. オリンピック憲章の理念と IOC の使命

このレガシーの問題は基本的に、多様性を尊重するオリンピック・パラリンピックの理念に関わる現象をめぐる問題である。そういう意味で、これはオリンピック・パラリンピックの理念的レガシーといえることができる。

その五輪理念の詳細を確認するために、公益財団法人日本オリンピック委員会の公式サイトに掲載されている当時の「オリンピック憲章」を確認するところから始めることとする。その表紙には、「オリンピック憲章 [2020年7月17日から有効] 国際オリンピック委員会」と記載されているものである¹³。近代オリンピックの生みの親ピエール・ド・クーベルタンから始まる数行の前文の後、「オリンピックの根本原則」の7箇条から始まる。その6条目に多様性に関わる条文は、以下のように述べている。

「6. このオリンピック憲章の定める権利および自由は人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治的またはその他の意見、国あるいは社会的な出身、財産、出自やその他の身分などの理由による、いかなる種類の差別も受けることなく、確実に享受されなければならない。」

関連する条項を見ると、「第1章 オリンピック・ムーブメント」の「1 オリンピック・ムーブメントの構成と全般的な組織」に続いて、「2 IOC の使命と役割」の18項目のうち、以下の諸項目が意図せざる偶発的レガシーに関わると思われる。

「6. オリンピック・ムーブメントに影響を及ぼす、いかなる形態の差別にも反対し、行動する。」

「8. 男女平等の原則を実践するため、あらゆるレベルと組織において、スポーツにおける女性の地位向上を促進し支援する。」

「11. スポーツと選手を政治的または商業的に不適切に利用することに反対する。」

「13. スポーツ・フォア・オールを促進し支援する。」

14. 環境問題に対し責任ある関心を持つことを奨励し支援する。またスポーツにおける持続可能な発展を奨励する。そのような観点でオリンピック競技大会が開催されることを要請する。

15. オリンピック競技大会の有益な遺産を、開催国と開催都市が引き継ぐよう奨励する。

16. スポーツと文化および教育を融合させる活動を促し支援する。

17. 国際オリンピック・アカデミー (IOA) の活動およびオリンピック教育に取り組むその他の機関の活動を促し支援する。

18. 安全なスポーツを奨励し、あらゆる形態のハラスメントおよび虐待からアスリートを保護することを促進する。」

ここまでで目次を入れて14頁であるが、これ以降「第2章 国際オリンピック委員会」の地位や組織、あるいは第3章以降で国際競技連盟、国内オリンピック委員会、競技大会や紛争解決やアンチ・ドーピングなどに関する詳細規程で全92頁ある。そのオリンピック憲章の冒頭に掲載されているのが、以上のオリンピックの理念に関わる「IOC の使命と役割」である。このことから、この「使命」が「オリンピック憲章」においていかに重要な位置を占めるかを確認すること

ができる。

7. 2020 東京オリンピックの偶発的無形遺産と笑いによる同調圧力

五輪の東京誘致をめぐる買収疑惑等々に見られたパンデミック以前からあった東京五輪の不穏な空気は、パンデミックによる延期によってそれまで水面下に隠されていた不穏なものが延期による心理的ストレスによって明るみに噴き出して来たかのように、一気に加速度をつけて水面上に浮上して来たかのである。平時において水面下に隠れていたものがパンデミックがもたらすストレスによって顕在化するというその意味で、パンデミックがもたらす社会学的サブマリン探知効果の一種をそこに見ることもできるかもしれない。

7-1. 「女性蔑視」発言問題

(1)まず無形偶発的レガシー(遺産)の第一は、2014 年以来、2021 年に開催された東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の準備および運営を監督してきた東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の初代会長であった森喜朗(元総理)による 2021 年 2 月 3 日の日本オリンピック委員会(JOC)の臨時評議員会での女性蔑視発言がもたらしたものである。JOC の女性理事を増やす方針への森氏の私見として報じられた。それによると、森元総理の「発言(要旨)」は、以下の通りである。

「これはテレビがあるからやりにくいのだが。女性理事を選ぶっていうのは、4割、これは文科省がうるさくいうんですよ。

だけど、女性がたくさん入っている理事会は、理事会の会議は時間がかかります。これは、ラグビー協会、今までの倍時間がかかる。女性がなんと10人くらいいるのか？5人いるのか？女性っていうのは競争意識が強い。誰か1人が手をあげて言われると、自分も言わなきゃいけないと思うんでしょね。それでみんな発言されるんです。

結局、あんまりいうと、新聞に書かれますけど、俺がまた悪口言ったとかなりですけど、女性を必ずしも数を増やしていく場合は、発言の時間をある程度、規制を促していかないとなかなか終わらないで困ると言っておられた。誰が言ったとは言いませんけど。

私どもの組織委員会にも女性は何人いました？7人くらいかな。みんなわきまえておられて。みんな競技団体からのご出身であり、国際的に大きな場所を踏んでおられる方々ばかりです。ですから、お話もシュツとした、的を射た、そういう我々は非常に役立っておりますが。欠員があるとすぐ女性を選ぼうということにしているわけであります。」¹⁴

これについて JOC 理事で女性スポーツ専門部会長の山口香氏は、次のようなコメントをした。—「非常に驚いた。東京五輪や日本のスポーツ界は多様性の順守に取り組んでいると思っていたが、一言ですべてが否定された」「JOCはこの発言について立場をしっかりと表明しなければ、容認しているととられてしまう」—

また森氏が日本ラグビー協会の会長のときに女性初の同協会理事に就いた稲沢裕子・昭和女子

大特命教授は、森氏は自分のことを言っていると思ったと言う。そして、次のようにコメントしている。

—「私が入ったことできっと会議は長引いたでしょう。でも、私は素人の立場から疑問や意見を言うために理事になった。…(中略)…会議で発言するのは当然のことだし、必要があるから発言している。今回の問題は男性からも『おかしい』という声がたくさん上がり、なぜジェンダーギャップの解消が必要なのかをみんなが考えるいいきっかけになった」¹⁵—。

ジェンダー多様性の必要を考えるいい機会になったとすれば、それは、意図せざるという意味で計画的ではないという意味で偶発的なオリンピック・レガシー、すなわち①「ネガティブなもの」にしても、②「無形のもの」にして、③「偶発的なもの」であるオリンピック・レガシーと評価することが可能である。2020 東京五輪に注目する海外メディアが「性差別」と報道する中で、近年の流行語で言えば、この「ピンチをチャンスに変える」ことができれば、多様性を推進するオリンピックの理念にかなったポジティブなオリンピック・レガシーを残すことができる。それがネガポジ転換できるかどうかは現時点ではまだ不透明で、これからの日本文化のソフト対応のための文化的理解の深化を進められるような研究とその相互交流にかかっている。たとえば、国文学研究資料館長のロバート・キャンベル氏は、「反転するとその場にいる男たちは『わきまえ』の囲いに座っていて物ごとをさくさく進めているようだが、さてその場に新しい風は吹くのか」とツイッターで投稿したと報じられている¹⁶。同様に米ニューヨーク・タイムズ(電子版)は「会議の中で誰も異論を唱えなかったことへの不快感を表明する声もあった」とツイッターを紹介した¹⁷。森氏は4日に撤回と謝罪をしたものの地位に執着したが、11日に辞意を表明して川淵二郎氏に後任を託したものの密室の権限なき後継指名への批判が集中して、橋本聖子五輪相への後継が決まった。

日本(男性)的な妙な「わきまえ」は、アナクロな無言の同調圧力による画一化を通じた専制体制の偏狭な文化をもたらして多様性を尊重する五輪の精神に逆行することになるという教訓を意図せざる知的文化的財産として、無形の偶発的オリンピック・レガシーをもたらすことができる。

しかし同時に注目されるのは、「評議員会では森会長の発言をとがめる声はなく、笑い声があがっていた。発言を傍観した評議員も不適切だったとの批判が出ている」との報道があり¹⁸、海外でも米紙ワシントン・ポストは「報道によると、委員会の数人が森氏の発言に笑い声を上げた」と報じた¹⁹。評議員会で森会長の発言への批判も違和を表明する意見も出ないどころか、数人の委員が「笑い声」を上げて迎合していたことが、本研究では注目される。アナクロな無言または「笑い声」が、排除された弱者に対する同調圧力による画一化の専制的支配を補完助長していたのである。

7-2. 開会式演出案「ルッキズム」問題

(2)偶発的無形遺産の第二は、東京五輪・パラリンピックの開閉会式の演出を統括するクリエイティブディレクターの佐々木宏氏が芸能人女性タレントの渡辺直美氏の体型を豚に見立てて嘲笑する開会式イベントの演出案を Line で提案したことが文春オンラインで報じられて、聖火リレーの開始を2021年3月25日に控えるなか、3月17日に辞意を表明し、この週刊誌の発売日の

18日に謝罪文を提出して辞任した件である。演出家は、缶コーヒーBOSSの「宇宙人ジョーンズ」シリーズやソフトバンクの「白戸家」シリーズなど、数多くのヒット作を生み出してきた日本の広告業界の巨匠と言っている。

「渡辺さんは自分で豚役もしていた」というツイッター上の指摘もあったし、渡辺氏も「私はこの体のことをポジティブに伝えてきたつもりだった。あと芸人という仕事もね。ポジティブにいろいろなことができるんだぞ、と。『芸人のくせに』とか、『デブのくせに』とかじゃなくて」とYouTubeのライブ配信でメッセージを發したという報道もあってボディポジティブ・ムーブメントも紹介された。美のダイバーシティ(多様性)やルッキズム(外見差別)の観点からの評価もあるが、「身体的特徴を批判することはもとより、笑いの対象としてあえて『いじる』演出手法なども含まれる、現在多くの人が『受け入れがたい』と認知するようになった差別や人権侵害に当たる行為」とも定義される「積極的ルッキズム」として批判されたことも²⁰、一年半も経過しないうちに忘れつつある現実において記録に残しておく意義がある。

7-3. 障害者差別行為問題

(3)偶発的無形遺産の第三は、東京五輪・パラリンピックの開会式の作曲担当であった小山田圭吾氏の高校時代の障がい者差別のいじめ加害とその二次的加害的インタビュー(嗤い)で辞任に追い込まれた一件である。2021年7月14日に小山田氏が開会式楽曲の作曲メンバーと発表されると、反差別を理念に掲げる五輪憲章に反するという批判がネットに登場した。1994年音楽雑誌の『ロッキング・オン・ジャパン』のインタビューで同級生へのいじめに触れ、1995年8月に出版された書籍『クイック・ジャパン』で「いじめ紀行」と題した企画にゲストとして登場し、「同級生をマットレスで巻いたり段ボールに閉じ込めたりしていじめたことや、障害者の特徴をあげつらって面白がっていた経験などを語っていた」²¹。これについて、組織委員会は16日夜に「不適切な発言」というコメントを發表しつつ続投させる意向であった。しかし障害者への日常的な加害行為を得意気に語ったという報道に国内の批判は高まる一方で、知的障害者と家族らの「全国手をつなぐ育成会連合会」は18日の声明で「自らのいじめ行為を面白おかしく公表する必要性はない」と批判、同日ロッキング・オン・ジャパン編集長が謝罪文をサイトに公表。海外でも英テレグラフ紙(電子版)は17日付の記事でそのいじめ行為の詳細とともに「ぞっとするような虐待」と表現し、英オブザーバー紙(電子版)は18日付で「ジェンダー平等や多様性といった五輪憲章に含まれる価値観を守るのに、日本が苦心している様子が露呈」と報じた。すると19日に加藤勝信官房長官が記者会見で「政府として共生社会の実現に向けた取り組みを進めており、全く許されるものではない」と批判、同じ日に本人から辞任の申し出があって組織委は受け入れたことが当日中に發表されたのである²²。大会組織委員会のガバナンス能力の欠如について、「結局、加藤官房長官から「適切に対応を」と求められるなどして方針転換したが、開会式が間近に迫っていることを理由に「許されるかなと考えた」(武藤敏郎事務総長)という言い訳には、あきれるほかない。円滑な運営がすべてで、五輪の理念など眼中にないことを国の内外に示した形となった」との論評もあったが²³、共存「共生」理念と運営やマネジメントや組織ガバナンスとの関係を考えるうえで、忘れてはならない具体的な教育的教訓がここにはある。

7-4. 「大量虐殺」嘲笑問題

(4)偶発的無形遺産の第四は、東京五輪の開閉会式制作チームで「ショーディレクター」（クリエイター役職のトップとされる）を務めていた小林賢太郎氏がホロコースト（ユダヤ人大量虐殺）を揶揄する23年前の嗤いネタで解任された問題である。

小林氏のお笑いコンビ「ラーメンズ」の破竹の勢いで活躍し始めた初期の活躍を報道する記事が残されている。NHK「爆笑オンエアバトル」で連勝してアドリブに頼らない計算された笑い芸で人気を集め初の全国ツアーで多忙な姿が活写されている。アドリブに頼らない以上はネタ作りが重要となるが、それはすべて小林氏の担当というところに氏の創造性がうかがえる。休暇が取れたら？というインタビューに対して、小林氏が「コントを書きます」と答えているところに24、27歳の小林氏の才能だけではない勤勉さと情熱を垣間見ることができる。シュールな設定に鋭い言葉で、「芸術的コント」という評価もされていた²⁵。初期からの非凡な才能をうかがうことができる。

これほどの才能が、1998年に発売されたビデオに収録されたコントで「ユダヤ人大量惨殺ごっこ」というセリフを使った。その動画が2021年7月21日の深夜からインターネットで拡散して批判が集中した。米国のユダヤ人人権団体「サイモン・ウィーゼンタール・センター」は22日未明、「どんな人にもナチスの大量虐殺をあざ笑う権利はない。この人物が東京五輪に関わることは600万人のユダヤ人の記憶を侮辱している」という抗議をサイトに掲載した。22日昼前の会見で、組織委員会の橋本聖子新会長は「本日解任する」と発表した。小林氏は組織委員会を通じて発表したコメントで謝罪するとともにセリフを書いた当時「浅はかに人の気を引こうとしていた」と吐露した²⁶。この誠実な告白に、しかしお笑いの同調圧力のメカニズムと本質が垣間見えている。

7月23日午後8時から国立競技場において無観客の中で、開会式が実施された。国内の感染者数の1日ごとの発表数は、この日が4234人(死者9人)であったのが1週間後の7月30日に10828人へと急増し閉会式の8月8日に14539人(死者9人)、8月20日に25992人(死者36人)を記録し、東京パラリンピックが開会した8月24日に21665人(死者42人)、東京パラリンピック閉会式の9月5日に12902人(死者31人)、それまで1万人～2万人以上の数字が続いていたのが閉会式翌日の9月6日に8224人(死者40人)、9月23日に3601人(死者49人)、9月30日に1575(死者42人)人へと、感染症の専門家も揃って驚くほどの急減を見せた²⁷。

8. 第三項排除効果の政治力学

以上、本稿で取り上げた2020年東京オリンピックが開催された年である2021年になってから生み出された4件の偶発的無形遺産、その(1)(2021.2)、(2)(2021.3)、(3)(2021.7)、(4)(2021.7)には、いずれもハード面ではなくソフト面であるというだけでなく、ある一貫した共通点がある。いずれもマイノリティ（少数派）の弱者を排除することで、多数派を形成し勝者の利益を得るた

めに、多数派の感情的つながり（野合＝United by Emotion）を作って多数派の共存・共栄のウィンウィンの関係を構築しようとする発想＝閉鎖的な（「お友達」）共存・共栄文化を示している。閉鎖的というのは、その共存・共栄圏に入れてもらえなかったメンバーは徹底的に排除されて不利な立場に置かれ不遇を甘受しなければならない、という意味で共通しているからである。（以上、いずれもコロナで1年延期にならなかつたら露見しなかつただろうけれども、感情的同調（圧力）の本音のキャッチフレーズだけが隠し忘れて取り残された形。同調せよ、さもなくば）——

こうした少数派を嘲笑し排除すると同時に排除した側がウィンウィンの多数派を形成し、その多数派形成による感情的一体感とウィンウィンの繁栄を言祝ぐ共存・共栄の精神と、「共存・共生の精神」とは、どこが違うのだろうか？

端的に言えば、共存・共栄の精神は違った個性をもつものの存在を認めることができない。分かりやすい事例では、いじめがそうである。たとえばA・B・C・D・E・F・G・H・I・Jの10人がいるとする。そのときAがオリンピックは楽しいよね、夢があるね、と言い、それに賛成する人は多くB・C・D・E・Fがうなづく。そのときオリンピックよりもプロレスのファンであったJがそうかな、プロレスの方が楽しいし夢があると本音を漏らしたとする。そのとき、たとえばAやB・C・D・E・Fが、そうねプロレスもいいよね、と思えるか、許容できる場合には、いじめには発展しない。そうではなく、AやB・C・D・E・FがJは私たちとは違う、だからJは私たちの隣人Jではなく違うXだと排除的な言動をとり、彼らがオリンピック的多数派を形成して、プロレス少数派を排除し始めるとき、いじめの現象が起動する。この状況下では、誰もブレーキを作動させることはできなくなり、たとえばIがオリンピックも楽しいけどプロレスも夢があるなどとJを擁護しようものなら、オリンピック多数派はIもJと同じでオリンピック多数派の仲間から排除されるという連動が始まるとき、それはもはや明らかにいじめ現象が始まっていると考えていい。だから、繁栄の共有よりも個性や友情を優先するような少数文化の片鱗でも見せたら最後、IもJと同様にマイノリティとして排除の対象になる。このことは、日本人なら大人でも周知の日常的な不可抗力的な政治力学で、だから個性的な少数派を援護することは自分も排除されるリスクを不可避免的に負うことになる。このような集団形成力学に、共存・共栄の精神と論理は歯止めやブレーキをかけることができない。一揉めるのは止めよう、全員が手を組めば儲かる一、それが共存・共栄の論理である。この共存・共栄のサークルの輪に、みんな参加しよう、ハンド・イン・ハンド、手を組もう、あの人たちの文化が計画した2020オリンピック開閉会式のスローガン「きもちでつながる（United by Emotion）」（＝野合）とは、こうした意味のウィンウィンの精神であったようだ。オレもウィンするから、キミもウィン（獲得）しろよ、邪魔だけはするな、個性の違いなんて水を差すな、それがウィンウィンの関係が要求するものである。

共存・共栄の精神は共栄という目標のために繁栄という究極目標を達成するために、共通繁栄以外の価値を優先する個性を排除することを否定しない。画一的な繁栄よりも個性や多様性を優先する価値観を、共存・共栄の繁栄論理は許容できない。たとえば繁栄という価値よりも利他的ボランティアや自分の信じる宗教的文化的価値を優先させる文化を、繁栄主義とともに共栄主義は許容できず排除せざるを得ない。

ディズニープラスサイトからの米国のSF映画『スター・ウォーズ』シリーズからのスピノ

フ作品のプロモートビデオが、2021～2022年にかけて動画サイト YouTube で盛んに流された。その数十秒のCM動画に登場する「ジャバは恐怖で支配した」「俺は敬意をもって支配する」「モメ事はよそう、手を組めば全員が儲かる」²⁸というセリフは、この限りで多数派形成による共存・共栄の論理の本質をよく体現しているように思われる。繁栄の共栄主義とは違う異なるものを持ち出すと「モメ事」になる、そうすると共存が立ち行かない、だから繁栄主義と異なる少数派の宗教的文化的価値を持ち出すのは止めよう、そんなことは止めて「手を組めば全員が儲かる」、これがウィンウィンの共存・共栄の精神と論理である。たとえば仮に一带一路の共存・共栄の精神がこのような画一的なウィンウィンの関係であるならば、漢民族の共栄文明に収斂せよ、チベットの言語もチベット仏教もウイグルの言語もイスラム教も持ち出すと「モメ事」になり共存・共栄にならない、少数派の言語も文化も宗教も止めて「手を組めば全員が儲かる」。共存・共栄の論理では、少数派（マイノリティ）の文化は生き延びる余地は縮小し、可能性の未来の多様性も未知の多様性も縮小する。

中国政府は公用語として北京語を推進する一方で、1990年代に中国全土の政策の一環で地元当局はラジオとテレビで上海語の使用を中止したという。AFP通信社の配信記事によれば、上海の放送局ではあまりに希少になった上海語話者を「パンダ」と呼ぶ冗談が飛び交うようになったという²⁹。中国国内においても上海語が伝える文化の多様性も多様な可能性も急激に縮小していることが伝わって来る。

9. 映像作品に見る共存・共栄の精神と共存・共生の精神との違い

ウィンウィンの共存・共栄の精神に対して、共存・共生の精神の違いとは何か。富山国際大学の公式ホームページ→大学情報には、「富山国際大学は「共存・共生の精神」をベースに、個性と知性を磨く教育研究に力を注いでいます」と明記してある³⁰。

富山国際大学の公式ホームページ→大学情報→学長挨拶・理念を閲覧すると、学長挨拶と富山国際学園の建学の精神「知性・教養・個性」のあとに、「富山国際大学の基本理念」が登場している。そこには次のように記載されている。—「富山国際大学の設立にあたって、「地球規模で考え、地域に根ざして行動すべき時代にあって、世界のいかなる人々とも友好関係を結びうる人間を育てる」ことが必要であるとして、「世界の国々の違ったものが違ったままで共存できる原理」や「人間・自然環境などが共生する社会の原理」を探求し、学ぶ場の創造が構想されました。こうした構想のもと、国際的視野に立脚した人間形成を基本に時代の潮流に対応できる人材を育成して、国際社会と地域社会へ貢献することを目指し、世界や地域に開かれた大学として、富山国際大学を平成2(1990)年に設立しました」³¹。

この「世界の国々の違ったものが違ったままで共存できる原理」や「人間・自然環境などが共生する社会の原理」を探求することを使命として、富山国際大学は設立されたことが分かる³²。そして、これが共存・共生の精神なのである。ここで「違ったものが違ったままで共存できる原理」を探求することが大学の使命であり基本理念である以上、多数派が自分たちとは違った少数派のものを排除しないという困難な課題の原理を求める以上、マイノリティ排除を認めないというのが、共存・共生の厳密な精神だということになる。

映画『草刈り十字軍』

さてウィンウィンの共存・共栄の精神を表現した上記の映像作品とは対照的な、「違ったものが違ったままで共存できる原理」を探求した映画作品がある。しかも、この「違ったものが違ったままで」共存を目指すというセリフを戦後日本の体表的な名優の一人で茶の間のテレビドラマ「大岡越前」役で有名な加藤剛が主人公役として語っている。のちに「児童福祉文化賞」(厚生大臣賞)も受賞することになった木下恵介企画、吉田一夫監督映画『草刈り十字軍』(1997年劇場公開作品)³³である。

1967年4月7日に富山県大山町の廃村・小原で農業開発技術者協会が農業事業地を開設、1970年8月に東京大学の山崎正一教授(哲学)を招いて小原事業地で「人と土の大学」を開学、そして1974年5月にヘリコプターによる除草剤の空中散布のための小原への立ち入り禁止の予告看板が設置されたことを契機に始まった反対運動としての「草刈り十字軍」運動という経緯の中で、この映画は、1974年のこの運動の実話を再現した映画であり、その中心となった農業開発技術者協会代表の足立原貫(富山県立短期大学教授)役を加藤剛が演じている。

ヘリコプターによる除草剤空中散布による環境破壊に単に反対するだけでなく、担い手が急減した夏の林業地における下草刈りという身体的機能を夏休み中の全国の大学生に呼び掛けて担う運動という意味で単なる反対運動の枠を大きく踏み越えた環境的倫理学運動であった。ここには富という実体的財産の配分的増加という実体増殖の観点よりも、人類社会にとって必要な身体的機能を担うことを優先するという「実体よりも機能」を優先する前例のない哲学的実践運動の特徴が表れている³⁴。その倫理的意義は当時においては理解されることも難しく、理解し賛同するものは少数派であったが、今日ならば持続可能な開発目標(SDGs)として国策化している政策の先駆例として理解できる³⁵。

それだけではない。この映画でも表現されているが、呼びかけられて富山の森林に集まった全国の若者は、それぞれ違った事情と違った参加動機をもって集まった集合であった。それが真夏の酷暑の中で「ハチ、マムシ、うるし」と格闘しながらの長期に渡る厳しい下草刈りの中で、身体機能による疲労の蓄積と限界の中で徐々に表面化していくことになった。これは実話であるが、この実話もこの映画はよく描いている。映画の中では山中でそうした違った事情と動機による路線論争めいた言い争いになったときに足立原は「ちょっと私の話をきいて欲しい」と語りかけ、「みんなそれぞれ違った思いで草刈りに来たと思う。ちょっと変わったアルバイトってもの、環境保全のためってもの、自分を鍛えてみたいからってもの、みんなのその思いはどこに行ってしまったんだ?」「たとえどんなに大変なことでも、いつか誰かがやらなくちゃならないことって、この世の中にはあるものだ、これもその一つじゃないのかな」。「私はみんなに向かって頼むから草刈りをやってくれとは言わない、ただこの草刈り十字軍運動に合意と共感を抱くのなら一緒にやろうじゃないか」。この話を聞いて草刈りに残るものもいれば、山を下りるものもいる。しかし、このさりげない言葉の中に共存・共生の精神はよく表現されている。

まず第一に、ここで足立原は各自の目的や「それぞれ違った思い」を、共通の繁栄つまり共栄や環境保全といった一つの目標または思想に画的に収斂して運動体を統率しようとしたり権力を統合しようとしたりは決してしない。ここは明らかに既存の(各国共産党などをはじめとする)イ

デオロギー的な思想運動とはまったく異なる独自性である。ここに「違ったものが違ったままで共存する原理」を探求するという運動の使命と理念が明確に具体化されていた。このことは目立たないだけでなく、世界各地のイデオロギー的な反対運動の通念とは全く異なるゆえに前例が乏しいために難解になりやすいためか、今もなおほとんど無理解のままに放置されがちな未知の新しい価値観とも言えるだろう。それゆえに、旧来の共存・共栄や今日のSDGsと比較したときに、その少数派の個性が際立つ。

次に第二に、—「たとえどんなに大変なことでも、いつか誰かがやらなくちゃならないことって、この世の中にはあるものだ、これもその一つじゃないのかな」—。ここには大変な身体的機能、たとえば除草剤の空中散布にも機械にも頼らず炎天下での手刈りという現代の先進国ではありえないような大変な「重労働」という身体的機能を担うという、—「それぞれ違った思い」という小異を捨てて共栄という大同について「財」という実体を増やして、増えた財産を山分けして共栄するという実体的共栄主義とは、まったく異なる—身体的実践的機能主義の理念が³⁶、この運動には体现されていた。

最後に第三に、このようにして第一の「違ったものが違ったままで共存する原理」を探求するという運動の使命と理念が、第二の「実体よりも機能を重視する」という実践的で身体的な機能主義という、財産所有優先の文明とは全く異なる独自の価値回路と深いところで内的に連結している。

この映画のラストシーンでは学生達の夏休みも終盤になる晩夏から初秋の頃に残った若者と新たに都会から合流した若者との協力によって、なんとかその社会的機能を果たして、ヘリコプターによる除草剤の空中散布の中止を実現させる（さらにこの映画もまた、同様の社会的機能の運動体によって生み出されたものであることの一端は、映画に登場するヘリコプターもこの「草刈り十字軍」運動の一協力者の私物の実体としてではなく機能のボランティア的参加としての機能的寄与であった³⁷）。

このラストシーンに続いて、最後は加藤剛の声で次のようなナレーションで終わる(なお、そのあとに別のナレーターでその後の富山県の協力による運動の継続がつけ加えられていることには別の示唆もあるが、その示唆については別稿を期する)。—「ここにはいろいろな思いを抱いてそれぞれいろいろな動機の下に集まってきて、そして違ったものが違ったままで草を刈るという共通の目的に向かって知恵と力を出し合い汗を流した、これからの新しい時代にみんなで目指すべき共存とはそういう形のものではないか、この山々ではそれが見られたという」—

以上は映画の中の場面であるが、実際にはたとえば運動が始まって4、5年が経過した頃、参加者の間に参加の動機や運動の目標をめぐる路線論争のようなものがこじれるようなことが生じたと記録されている。そのとき各宿舎を廻って次のように説かれたという。—「参加動機は一人一人違っていいじゃないか。運動目的についても、一つの目的だけを草刈り十字軍運動の旗印にすれば、運動自体をつぶすことになる。参加動機も問題意識も違った者が一つ釜のメシを食い、草を刈るという共通の作業に力を寄せ合い汗を流す。そのことに意味があるんだ。違った者が違ったままで共存できる方途をさぐるからこそ、いま人類がかかえている最大の課題じゃないか」³⁸—。

この言葉は、この映画の原作となった本に記されて公刊された。したがって共存・共生の精神

は少なくとも 1970 年代には富山の地において生まれていたという意味で、いわば富山の地域哲学と言えるものである³⁹。それゆえ、それははじめからマイノリティを排除しないでダイバーシティを尊重する精神を有していた⁴⁰。

その一端は、その映画にも登場する視覚障害者の「草刈り十字軍」運動への第 1 回目からの参加に顕れている。この映画を見た視聴者の感想で、あの全盲の視覚障害者の登場と演出は効果的で良かったですね、というものが多々あったという。つまり、山中の草刈り運動への全盲障害者の参加は架空の設定で作品制作上のフィクションとしての演出と誤解されることが多かったと、原作者から聞くことがあった。映画作品の中では「宮川さん」という名前に変えて登場するが、実名は映画の原作本で公開されているように有川光男氏という実在の人物である。

10. 共存・共生の地域哲学におけるダイバーシティ(多様性)の重要性

「草刈り十字軍」運動の牽引者である足立原貫に、この運動が 1974 年以来 40 年以上に渡って継続した理由を筆者が質問した際に、答えは予想に反して運動の理念や思想的意義が語られるのではなく、複数の個人名が示された。そのことがまずは、意外であった。意外であったからすぐには理解できず何度か同じ質問を繰り返したが、いつもその答えの筆頭として語られることは「有川さんにまた会いたかったから」というものであった。答えに登場する重要人物は、全盲の障害者であり、あるいは女性たちであった。

今日から振り返ると、この表面的な意外性の裏にあるこの地域哲学の本質は、実はこの映画の原作となった運動の記録として刊行された著作の中に、目立ちにくいのでともすると見落とされがちではあるものの記されている。この地域哲学の本質にかかわりながら見落とされ忘れられがちな重要なドキュメントであるので、長文ながらも重要な資料としてあえて次に引用する。

後年、「草刈り十字軍」発足時の参加者について足立原が語るとき、必ずその名を挙げる人物が二人いる。有川光男と井口珠子である。

草刈り十字軍運動への参加者募集が盛んに報道されるようになった七月下旬、有川は北日本出版社へ電話をかけてきた。たまたまそこに居合わせた足立原はその電話を受けたが、受話器を耳にしてとびこんできた言葉に、一瞬息をのんだ。

「有川と言います。ラジオのニュースで知りました。わたしにも参加させていただきませんか。私は全盲なのですが……」

思わず「えっ！」と出そうになった声を飲み込んで足立原は、ゆっくりゆっくり言葉をえらびながら言った。

「有川さんとおっしゃいましたね。有川さん、あなたはきっと私よりもいろいろなものがよく見えるのでしょうね」

電話機の向こう側で、むせび泣いているらしい有川を感じながら足立原はつぶけた。

「しかし、とても危険な仕事です。現場は山の急斜面で、鎌も大きなものです。体力もかなり必要です」

一言ずつ区切るように言い、何とかあきらめてもらおうと、足立原は懸命であった。…(中略)…

「わたしたち盲人は、すべてころんで道をおぼえ、すべてころびながら仕事をおぼえるのです」

そこまで言われて足立原はついに決意した。

「どうぞいらっしゃってください」…(中略)…

これが縁で有川は翌昭和五十年に「人と土の大学」に参加し、その後三～四年毎夏、富山へ来た。二年目の夏、…(中略)…握手したときの有川の手の感触を忘れられない。

東京・本郷の学士会館における説明会のとき、草刈り現場のきびしさを強調するあまり足立原はつい「女、子供にはとてもできる作業ではない」と口をすべらせた。これが大変な騒ぎの種となった。説明会が終わると、足立原は数人の女性参加者に取り囲まれ、強い抗議の弁を浴びせられた。

「すごい差別じゃないですか」

「女・子供にはできないとは何ごとです。女性も参加させなさい」

「とんでもない失言ですよ、取り消しなさい」

足立原は平身低頭した。

その女性たちが去ったあと、それまで少し離れて一人ポツンと立っていた小柄な女性がニコヤカに近づいてきた。そして足立原の前に立つと、笑顔のまま、ちょっと首を傾けて言った。

「あのう、私にも刈らせていただけませんか？」

足立原はあわてて答えた。

「さっきは失言でした。どうぞどうぞご参加ください」

足立原を取り囲んで強弁した女性たちは、とうとう一人も参加してこなかったが、…(中略)…井口珠子は、八月四日に小原へやってきて大活躍し、小原を打ち上げたあと大沢野に転進、九月十一日の最終日まで頑張った⁴¹。

こうした経緯を経て1年目から障害者と女性の参加を単に受け入れただけでなく、この運動が半世紀近く継続しえた筆頭の理由として不可欠とも言えるような構成要素として重要な役割を果たしてきたという意味で、イギリス人や中国人の参加者ととともに、こうした参加者に見られる多様性は、この運動の持続可能性の哲学と一体のものということができる。なぜなら足立原は「運動を続けられたのは有川さんに勇気を与えられたと感じていた」からと、点字と活字とで記録されているからである⁴²。

その有川は、世紀を超えて毎年夏には枕崎のかつお節百人分を運動に送り続けた。2009年8月5日の第36回「草刈り十字軍」運動の交流会には、翻訳家のサイモン・ピゴット氏とともに参加した。共存・共生の精神を生み出した富山の地域哲学において、多様性(ダイバーシティ)は単に理想ではなく現実を支える柱となっていたのである⁴³。

映画では有川との会話は電話ではなく上野公園での対面となっているところは映画製作上の演出となるが、会話の内容そのものはノンフィクションである。突然の参加申し込みの電話に「有

川さん、あなたはきっと私よりもいろいろなものがよく見えるのでしょうか」という足立原の言葉の背後にある感性の東京 2020 オリンピックの組織委員会の感受性からの距離の遠さは、あまりにも遙かである。これが共存・共生の精神とウイーン・ウイーンの共存・共栄の精神との間の距離の遠さに反映することになると思われる。電話の向こう側で泣く気配には、「逆境は恩寵」と考えるようになった有川の人格が感じ取られる。—「目は見えなくなった。代わりに人の心の色が見えるようになった。『逆境は恩寵』と考えるようになった」⁴⁴—。これは 2009 年の『点字毎日活字版』に掲載された有川の境地である。

南原繁が生涯敬愛した師の内村鑑三が序文を寄せた『逆境の恩寵 徳永規矩遺稿』（警醒社書店、大正 9 年）という遺稿集の表題を彷彿とさせる思想である。足立原貫が序文を寄せた『宮下鉄蔵の人生としごと』という遺稿集に、富山のチューリップ史の「育ての親」でありながら⁴⁵、その産業史から名前を消された宮下鉄蔵が「このような不運な人生を歩ませた人々のことも人生の総決算として『自分の最大の恩人であったかも知れん』という意味の言葉で語っていた」ということを、もう一人の序文寄稿者である石黒武夫が書いていたことも彷彿とさせる⁴⁶。共存・共生の精神は圧倒的にマイノリティと共にはじめて生きることが持続可能になった精神であり、ウイーン・ウイーンの関係に立って少数者を排除して繁栄の分け前を獲得(ウイーン)する共存・共栄の精神とは遥かに遠いということが示唆されている。一方を排除してサンフランシスコ講和条約を締結して高度成長による逸早い繁栄に与ろうとする片面講和が片面だけでの共存・共栄の精神であるとするなら、南原繁の全面講和論はむしろそうした少数者を排除しない共存・共生の精神の側に立とうとしたことになる⁴⁷。ここに内村鑑三—南原繁—足立原貫に、共存・共栄の精神とは異なる共存・共生の精神の系譜を読み取ることが可能である⁴⁸。このような研究を通じてはじめて、両者の精神が僅か一文字違いでもあまりにも遠く離れたものであることが、ようやく明確になる。



白杖を持つ有川光男氏 2009年8月5日合同交流会



『点字毎日活字版』2009年6月4日5面

11. おわりに—富山県地域哲学の中の共存・共生の精神

オリンピック憲章の共存・共栄の理念は 1998 年以降、オリンピック憲章にマイノリティやダ

イバーシティの尊重の理念が入ってくるのはもっと後で、さらに 2021 年の組織委員会においてはなお未知未意識未自覚で国内世論と国際世論の集中砲火を被ったが、富山県地域哲学の共存・共生の理念は少なくとも 1974 年に遡ることができる。このこともオリンピック・レガシー・キューブという理念型を参照枠にして問題点を整理することによって分かったことである。

東京 2020 オリパラ組織委員会のケーススタディを通して、またそれによる共存・共栄と共存・共生の精神の現象論的差異の比較論的研究を通して、両者の理念構造の差異が明瞭になった。それとともに 21 世紀の焦眉の急である課題が何であるかが明瞭になるとともに、この焦眉の急を救うものが人口に膾炙した前世紀的な共存・共栄のウィン・ウィンの精神ではなく「違ったものが違ったままで共存する方途を求め」共存・共生の精神であることを明瞭にすることができた。

そして少なくとも 1974 年に遡ることのできる共存・共生の精神は、1990 年頃に一朝一夕の一夜漬けで急拵えされたものではなく、たとえば除草剤の空中散布のようなその時々のでん地域の課題に取り組むなかで、マジョリティ(多数派)には決して見えないものが「見える」マイノリティ(少数派)や障害者に学び支えられつつ共に育ち、それだからこそ「違ったものが違ったままで共存する」多様性にこそ活路を見出し、だからこそ未知の未来を構想し創造する可能性をもっているのである。『『理性』を薔薇の花として、それと厳しき『現実』との融和』(南原繁)と言えは一見はロマン主義的にも聞こえるが⁴⁹、しかしそれは過去に理想郷を見るのではなく、「一つの社会の死から」⁵⁰、地域の見捨てられた廃村から未来の可能性を切り開くマイノリティ(少数派)の「自主創造」の運動とともに育まれた地域哲学に根ざすものである。

(註)

1 「NHK 福祉情報サイト ハートネット 視覚障害ナビ・ラジオ 今月のトピックス 特集・点字毎日創刊百年を迎えて」 <https://www.nhk.or.jp/heart-net/shikaku/list/detail.html?id=47336> 2022 年 9 月 15 日閲覧。

2 「毎日新聞社 毎日の取り組み 点字毎日」 <https://www.mainichi.co.jp/co-act/tenji.html> 2022 年 9 月 15 日閲覧。

3 読売新聞「五輪組織委元理事 逮捕 スポンサー契約便宜か 5100 万円受託収賄容疑」2022 年 8 月 18 日東京朝刊 1 面。

4 読売新聞「五輪汚職再逮捕「極めて残念」JOC 会長」2022 年 9 月 7 日東京朝刊 17 面。

5 読売新聞「五輪汚職 出版界大物 逮捕に衝撃 角川容疑者 「誰も逆らえず」」2022 年 9 月 15 日東京朝刊 31 面

6 風土概念と結合したヘルダーの教養概念の詳細については、拙稿『『トネリコの里』からの『知性・教養・個性』と南原繁の教育哲学—自校史・郷土教育と子ども育成学構築の基礎的研究— 富山国際大学『子ども育成学部紀要』第 6 巻、2015 年 3 月、脚注(28)、参看。

7 東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会 東京都ポータルサイト

<https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/special/watching/tokyo2020/organising-committee/budgets/> 2022 年 8 月 4 日閲覧

8 NHK(日本放送協会)NewsWeb「オリンピックの施設 “負の遺産” にしないために」(2021 年 12 月 27 日 18 時 40 分配信) <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20211227/k10013406221000.html> 2022 年 8 月 3 日閲覧。

9 三菱総合研究所(MRI)「レガシーとは何か」 <https://www.mri.co.jp/knowledge/wisdom/legacy/about/index.html> 2022 年 8 月 3 日閲覧。

10 Gratton, C. & Preuss, H.(2008) Maximizing Olympic impacts by building up legacies. *The International Journal of the History of Sport* 25(14), 1922-1938

11 Gratton, C. & Preuss, H.(2008), 三菱総合研究所(MRI)「レガシーとは何か」

12 東京オリンピック(五輪)・パラリンピック大会組織委員会の理事会が 2022 年 6 月 21 日に東京都庁であり、大会についての公式報告書を承認した。2022 年 6 月 22 日付朝日新聞「東京五輪の最終報告書 識者が批判する「組織委が書かなかったこと」

¹³ 公益財団法人日本オリンピック委員会 オリンピック憲章

<https://www.ioc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2020.pdf>

なお、2021年8月4日時点または当該オリンピック2020東京大会期間中時点で「最新のオリンピック憲章」は、「オリンピック憲章 国際オリンピック委員会 公益財団法人 日本オリンピック委員会 [2021年8月8日から有効]」<https://www.ioc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2021.pdf>である。

¹⁴ 朝日新聞「暴言「反省」本当に？ いらだち会見「邪魔なら掃いて」 森会長・女性蔑視発言【大阪】」2021年02月05日朝刊1社会25面。

¹⁵ 同前。

¹⁶ 朝日新聞「暴言「反省」本当に？ いらだち会見「邪魔なら掃いて」 森会長・女性蔑視発言【大阪】」2021年02月05日朝刊1社会25面。

¹⁷ 朝日新聞「森会長の発言、海外でも報道 「女性がたくさん入っている会議、時間かかる」」2021年02月04日夕刊1社会9面・

¹⁸ 朝日新聞「森会長、発言撤回し謝罪 「女性が多い会議、時間かかる」 辞任は否定 五輪組織委」2021年02月05日朝刊1総合1面。

¹⁹ 朝日新聞「暴言「反省」本当に？ いらだち会見「邪魔なら掃いて」 森会長・女性蔑視発言【大阪】」2021年02月05日朝刊1社会25面。

²⁰ 『週刊アエラ』「五輪が炙り出す日本の「遅れ」 渡辺直美さんへの差別的発言と#ボディポジティブ」2021年4月5日発行、64頁。「ルッキズム」というカタカナ語の登場は新しく、朝日新聞記事のデータベースによると早くて「(フォーラム)人は見た目が何%? : 2 私も言いたい」2017年7月9日朝刊9面のオピニオン1面で紹介された読者の声の中に登場するのが初見で、その後は2020年に9件程度、2021年以後2022年7月までに40件程度と急増していることがわかる(朝日新聞記事データベース閲覧IIビジュアル、2022年8月8日検索)。なお、スタンダップ・コメディにおけるルッキズムをめぐるコメディの笑いの両義性をめぐるインターセクショナルリティについては、2022年3月の米アカデミー賞授賞式で妻の丸刈り頭の外見を司会のコメディアンに嗤いのネタにされた俳優のウィル・スミスがその司会者を殴った事件を取り上げた日本経済新聞「ウィル・スミス事件のもやもや感」(日本経済新聞2022年5月22日付朝刊「文化時評」12面)が多義的な論評をしているが前年のオリンピックの開会式の演出をめぐる辞任問題には触れていない。しかし以上のことから、こうしたルッキズムと嗤いをめぐるインターセクショナルリティの問題は日本では東京五輪の年である2020年の頃からマス・メディアで急に注目されるようになったことがうかがえる。なお、月刊誌『現代思想』(青土社)が「特集=ルッキズムを考える」を特集するのが2021年11月号であり、「特集=インターセクショナルリティー複雑な<生>の現実をとらえる思想一」を特集するのが2022年5月号であったところにも、表象文化が複雑性を急加速する近年において、その知的課題にチャレンジする社会人文学の消息を伝えている。上記の2紙1誌の消息は、21世紀の新たな状況を反映するとともに再生産するものでもある。なお読売新聞の記事データベース検索(「ヨミダス歴史館」)によると読売新聞では米国の新語紹介の小さな記事で読売新聞「[海外の文化] アメリカで斜に構える商品名、新語」(1991年7月2日付東京夕刊13面文化面)が早いものの、これも米国の新語最新事情として新語「ルッキズム」が「ウェイティズム」(体重による差別)、「ハイティズム」(背の高低による差別)とともに「一連のイズム語群」とともに新語登場として列挙されただけで内容への考察や理解も論評もなく、2021年7月以降2022年7月まで9件しかなく差別やマイノリティの問題についてのメディア感度の差が浮き彫りになる。

なお本人個人には、最初のアイデアのLine投稿時の違和反応にすぐに謝罪して撤回するなどのコンセンサスに弁護の余地の可能性はありうるにしても、本稿の研究意図は個人批判にあるのではなく、2021年開催の東京オリンピック組織委員会の準備に見られたオリンピック憲章からの乖離現象の4連続のクラスター発生に注目して、社会学的社会意識論の社会病理学または比較社会学的研究に焦点を置くものである。本稿で取り上げた他の事例でも個人的には弁護の余地はありうる可能性もあるが、本稿は個人問題ではなく、むしろ日本の大会組織委員会や日本社会がどのように同調したり反発したり反応したのかという問題から社会意識論をめぐる社会動学的研究を介して、現代における「ウィン・ウィンの関係」という現代的共存共栄をめぐるステレオ・タイプの社会学的特性の抽出に研究の関心を向けている。

なお上記『週刊アエラ』「五輪が炙り出す日本の「遅れ」」というタイトルに明示されているように、「森氏の発言や佐々木氏の演出案は、日本社会の日常にありふれた価値観に基づく言動だった。だから、それを受け止める社会の一部も「国際常識」とのギャップを引きずったままになる、というわけだ」(同)という表象には、アメリカやフランスを進んだ先進国とし、それらの「国際常識」をグローバル・スタンダードとして、それから「遅れ」た日本という定石もまた、日本的スタンダードによる常套のマッチポンプ手法による販促活動を見ることもできる。欧米中心の「国際常識」をグローバル・スタンダードとして、無批判に受容し日本にローカライズすればよいというステレオ・タイプに対しても、M.ウェーバーが客観性論文で繰り返し取り上げた「プロクルーステースの寝台」の教訓のような慎重さを要する。

²¹ 朝日新聞「同級生や障害者いじめ、開会式作曲者が過去の発言謝罪」(2021年7月17日朝刊30面)

²² 朝日新聞「「続投」の組織委、謝罪 やまぬ批判、迫られ 小山田氏辞任」(2021年7月20日朝刊社会面33面)

²³ 朝日新聞社説「小山田氏辞任 五輪理念ますます遠く」(2021年7月21日朝刊12面)

²⁴ 朝日新聞「お笑いコンビ「ラーメンズ」(旬ピー通信)」(2000年8月26日朝刊29面)

- 25 朝日新聞「シュールな笑いで快走 「芸術的コント」のラーメンズ」(2002年2月19日夕刊芸能16面)
- 26 朝日新聞「開会式演出、小林氏を解任 過去にユダヤ人虐殺揶揄 組織委「式は予定通り」 東京五輪」2021年7月23日朝刊1総合1面)
- 27 日本国内の感染者数 (NHKまとめ) <https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/data-all/> 2022年8月22日閲覧
- 28 「ボバ・フェット/The Book of Boba Fett | Disney+(ディズニープラス)」
<https://disneyplus.disney.co.jp/program/the-book-of-boba-fett.html> 2022年8月30日閲覧
- 29 「AFP BB News パンダ並みに希少になる上海語?生き残りかけた戦い 2012年2月26日 14:44 発信地:上海/中国 [中国・台湾 中国]」<https://www.afpbb.com/articles/-/2860827> 2022年8月30日閲覧
- 30 こうした大学公式ホームページの記載の詳細は、富山国際大学『平成22年度 大学機関別認証評価 自己評価報告書・本編 [財団法人 日本高等教育評価機構]』(平成22(2010)年6月)の「I. 建学の精神・大学の基本理念、使命・目的、大学の個性・特色等」(1~3頁)に基づいている。
- 31 「富山国際大学の基本理念」<https://www.tuins.ac.jp/about/philosophy/> 2022年8月30日閲覧
- 32 拙稿「「共存・共生の精神」の生成と構造—教育と福祉の統合の基本哲学と大学への「火種」—」富山国際大学『子ども育成学部紀要』第7巻、2016年3月。
- 33 制作:リエゾン・ビューロー(1997)、制作協力・配給:くれないん館・人間行動研究所、上映時間:1時間40分。
- 34 「所有を前提とする実体より、所有にこだわらない機能を重視、その場と機会を得ればいずれの地へもおもむいて活動する」(足立原貫・野口伸『山へ入って草を刈ろう—「草刈り十字軍」十七年の軌跡』朝日新聞社、1991年、11頁)。
- 35 SDGs等の環境をめぐる持続可能性の哲学運動の先駆としての「草刈り十字軍」運動の詳解については、拙稿「ボランティアの環境倫理学—戦後造林政策の限界と 35 回目の草刈り十字軍運動—」富山国際大学『国際教養学部紀要』第5巻、2009年3月、p.79-90。
- 36 身体的実践の機能主義の理念(エイドス)の裏付けとしての現実(ヒュレー)については、南原繁『歌集 形相』とともに、東黒牧台地の地方風という富山の地方風土に根ざした教養形成概念の詳説については、『富山国際大学三十周年記念誌』「第1章 富山国際大学の創立理念」(2021年3月、9頁以降)ならびに拙稿「「共存・共生の精神」の生成と構造—教育と福祉の統合の基本哲学と大学への「火種」—」富山国際大学『子ども育成学部紀要』第7巻(2016年3月、24頁以降)、参照。
- 37 映画に登場するヘリコプターは、立体農業から農業の六次化の先駆としての役割と機能を果たした富山県の先駆的農場における「農工一体化の理想」(吉田実富山県知事)の六次化的実現を体現するものであった。
- 38 足立原貫・野口伸『山へ入って草を刈ろう—「草刈り十字軍」十七年の軌跡』朝日新聞社、1991年、278頁以降。
- 39 富山の郷土史とその地域哲学「共存・共生の精神」との関係の詳細については、拙稿「「富山国際大学の聖地」と共存・共生の精神—郷土に根ざした自校史研究—」富山国際大学『子ども育成学部紀要』第8巻、2017年3月。
- 40 富山の地域哲学「共存・共生の精神」における「インクルージョン(誰にでも開かれている)」という特性の詳細については、拙稿「「日本現象」としての富山の「草刈り十字軍」運動に関する研究—西洋哲学との比較および国際日本学の観点から—」富山国際大学『子ども育成学部紀要』第6巻、2015年3月、47頁。
- 41 足立原貫・野口伸『きみ青春の一夏 山へ入って草を刈ろう—「草刈り十字軍」運動の発端と展開』三洋インターネット出版、1997年、233頁以降。
- 42 「有川光男さんを探して 草刈りと点字毎日 映画でも重要な位置づけ 草刈り十字軍」『点字毎日活字版』2009年6月4日、5面。
- 43 2009年8月に富山の「草刈り十字軍」運動を有川光男が再訪した折に語った富山「草刈り十字軍」運動に関する「なつかしさ、やさしさ」という形容をめぐる文明論的考察については、拙稿「国際日本学の課題と富山の哲学運動—「共存」哲学の「なつかしさ、やさしさ」のアルケオロジーと国際理解—」富山国際大学『子ども育成学部紀要』第3巻、2012年3月、38頁。
- 44 同上、「有川光男さんを探して 草刈りと点字毎日 映画でも重要な位置づけ 草刈り十字軍」『点字毎日活字版』2009年6月4日、5面。
- 45 宮下鉄蔵における富山のチューリップ産業史における富山の地域哲学「共存・共生の精神」の「機能」重視の実践哲学については、拙稿「宮下鉄蔵のチューリップ哲学と佐藤信淵の農哲学—「産業」概念に関する比較哲学的研究—」富山国際大学『子ども育成学部紀要』第7巻、2016年3月。
- 46 宮下鉄蔵遺稿集刊行会『宮下鉄蔵の人生としごと』北日本出版社、1974年7月2日発行、「序文」7頁。この発行日はまさに「草刈り十字軍」運動が始まった最中であり、「草刈り十字軍運動への参加者募集が盛んに報道されるようになった七月下旬、有川は北日本出版社へ電話をかけてきた」のである。類は友を呼び、鹿児島県の共存・共生の精神は富山県の共存・共生の精神に共鳴して参加希望の電話をかけてきたとも考えられる。足立原が半世紀近く「運動を続けられたのは有川さんに勇気を与えられたと感じていた」からというのも、このように系譜をたどるとき、筆者が最初に感じたような意外でも不思議でもないことが理解できる。ドイツの哲学者 H.G. ガダマーの「地平の融合(Horizontverschmelzung)」としての「理解」であるが、それは容易ではない時間と歴史的経験を要すると思われる。

⁴⁷ なお2022年6月3日、南原繁射水郡長がかつて勤務した射水郡役所にほど近いと思われる高岡駅前の富山県民カレッジの高岡教養講座での筆者拙講演「風景に刻まれた富山哲学～アメリカ軍が尊敬した南原繁の〔富山〕遺産」の最後の質問時間において、受講者からの質問で「南原さんが戦後に提起した全面講和を日本が実施していれば、今の〔2022年2月24日からの〕ウクライナの問題は防げたのではないか」という問題提起があった。南原繁の富山県射水郡長赴任百年を超えて、その良質な現実的理想主義の地域哲学が富山県射水平野に受け継がれて根づいていることの証左と考えられる。今も射水市新湊博物館に受け継がれている（南原繁『歌集 形相』以前の）1935年の南原繁の短歌「伊・エ・開戦 なだれいる イタリアの 暴戾〔ホウイ〕の 力はどまむ 他 尔国の奈きか うち落す 爆弾(たま)は砕けて たわや奈る おみ奈も子らも あまた死にとふ」（富山県射水市新湊博物館所蔵 片口安太郎宛南原繁書簡 1935年10月13日消印より）が嘆いた1935年のイタリアによるエチオピア侵攻は、世紀を超えて2022年のロシアによるウクライナ侵攻を彷彿とさせるとともに、その継承された富山県地域哲学と短歌のアクチュアリティを看取することができる。

⁴⁸ なお、教育基本法の策定に当たった教育刷新委員会の委員長であった南原繁が兼任していた東京大学総長として式辞を述べた最後の東京大学入学式に入学生として出席した足立原貫が聴いた式辞の思い出については、北日本新聞「南原繁の功績学ぶ―富山国際大子ども育成学部 足立原さん講義―」2018年4月20日25面(地域)、参看。ここには、1917年に富山県射水郡長として赴任した南原繁の地域的共同体主義の哲学的遺産が、東京大学教養学部入学式と富山県立大学とを經由して富山の地域哲学に継承され、さらに「草刈り十字軍」運動の身体性の独自の機能主義として強化発展していった哲学的系譜を看取することが可能である。

⁴⁹ 丸山眞男・福田歓一編『南原繁著作集』岩波書店1973年、7巻36頁。

⁵⁰ 足立原貫『一つの社会の死から』北日本新聞社1975年、参看。